光明

第十卷第十二號

衆のために法藏を開き
廣く功德の寶を施し
常に大衆の中に於て
說法獅子吼せん
一切の佛を供養して
もろ〳〵の德本を具足し
願慧悉く成滿して
三界の雄たることを得ん
（大無量壽經）

大眞日本宗 光明團本部發行

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明

第十卷第十二號【定價 金拾錢】

宗教講座 第一

聖

いて、すゝり泣く者の求めてや
、そこに燦として輝く、釋尊の
つて見出されたる道。
――根本佛教は、そも〳〵何を說
て親鸞聖人は何處に、彼の魂の安
か。
來たる所全て、主管の肺肝に波うつ血
のしぶき、感激の文字、この書があなたの心頭に、一
絲の光明をもたらすであらふことを、喜びつゝ敢てお
すゝめ致します。
（定價 參拾錢）

◆合掌宣言

一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷つき痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の內に流れたまふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共存の涙わく。共に和らぎ、慰藉し、篤勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

◆卷頭の叫び◆

日が暮れる。何だか寂しい。
歲が暮れる。何だか寂しい。
暮れる時、何人も久遠の凡夫である。
疲れた、暗い、悲愁のむねに、
響くは一体何の音か、
靜かに我にかへつて、考へる時、
合掌の胸に念佛がある。
願生の夕べ、沈默の胸に、
聞ゆる聲は一体何か、
ひし〳〵とせまる哀感の中に、
紅にそむ西をながめて、靈の故鄕に通ふこの心、
日は暮れてゆく。靜かなる願生の夕べよ。

西岸招喚

住岡狂風

×

前号までの大略……一人の旅人がある。誰一人ゐない無人の曠野を西に向つて旅を急ぐ。忽ち前に左に火の河、右に水の河、其中間に幅四五寸の白道があらはれる。彼の後からも横からも群賊悪獣があらはれて追ひかける。彼が全くゆきつまつた時、東の岸に大善智識釋尊のみ教へ『汝決定して此の道をたづねてゆけ、必ず死の難なけん。』とのやり聲を聞いた。そのみ教こそやがて、久遠のみ親たる阿彌陀如來の西岸上のよびごゑ『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことをおそれざれ』との勅命をさししめして下さるのであつた。前号では『汝一心正念……』まで味つて來た。本号では『直ちに來れ』のみ云葉について味はつてゆく……

本文

又西岸上に人有つて喚ばうて言はく『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ』と

本年の六月に私は初めて朝鮮にゆきました。その時に大變な失敗を致しました。廣島を出發して下關から關釜連絡線にのりました。夜の海は大變に荒れて三千噸の大船もグラン〳〵ゆれます。朝釜山についてからのことです。先づ朝食をとるために旅館に入りました。私どもは固城郡の莊佐里に行くのです。もう本團の花岡君も一二度行つた所であるし、ぼんやり考へて、花岡君にも問はず、先方にもよく問はないで私も

吉藤君も釜山で莊佐里行きの船にのればいいと簡單に考へてゐたのです。さて旅館の女中に固城や莊佐方面にゆく船の時間をとはした處、もう出た後でないと云ひます。その答には怪しい處もあるので、吉藤君は、交番其他に問合せにゆきました。處が其結果釜山から莊佐里ゆきの汽船はない。莊佐ゆきの船に乘ろうと思へば、汽車にのつて北に走り、三浪津から馬山行きに乘換へて、馬山に行けば、其處から莊佐里ゆきが出るとのことです。私たち二人はすぐ敎へられた通りに汽車にのり、三浪津で馬山ゆきにのりかへました。汽車中でも不安心ですから度々問ひます。馬山にも、舊馬山と新馬山があります。そのどちらだらうか。私ども敎へられた通りに、舊馬山におりて海岸に船問屋をたづねました。すると果して、莊佐里にゆく船はこゝから出ます。しかしもう今日はないが明朝七時に出發するとのことです。それではもう今日中に彼の地に到着することは出來なくなります。自動車でも行けさうに聞いたので電話を自動車屋にかけて貰ふと、今日は客が少いから出ないとのことです。あとで聞けば十町

餘しかない新馬山からはいくらでも出てゐるのですが、船にのせやうとする野心は私どもにそれを敎へませぬ。私どもはとう〳〵こゝで一夜を旅館で明かしました。あくる朝七時に發動船にのりました。然るに不幸にも船が、鎭海灣に出た時、機械に故障をおこして動かなくなりました。全く困りはてゝゐるとやつと動き出したので船はあと返りです。心細いことおびたゞしい。船長は大變に同情してくれます。やがて船が新馬山についたが私たちは全く困りました。しかしこゝから固城ゆきの自動車が出ることを聞いたので、やつと安心して午後二時固城ゆきの自動車にのりました。四時頃私たちは背屯で自動車をおりました。鮮人ばかりゐます。內地人の店がありましたので荷物をあづけこれから歩くのですが、二里だと云ふ人、四里だといふ人、全くわかりません。背屯から半里も行つた時、入海を渡船で横切らねばなりません。其處でも鮮人ばかりなのでまごつきましたが、其船中に一人の內地人の五十位の僧人がゐました。あまり親切に敎へて呉れませんが、鮮人から色々と問ふて呉れて、船を上つたら

右に行つた方がいいといふことだけがわかりました。それと同時に、鮮人に道を聞く時には莊佐里といつてはわからぬから『ウズレ』と云へと敎へてくれました。

朝鮮の田舍は今田植の際中です。內地と全く變りなく忙しく田植してゐます「イロチャラー」といつて牛を叱つて使つてゐるのもおかしい。道路を西南にむかつてゆきつゝも私たちは不安心におそはれます。どの邊から右に道をまがつたらいいかわかりません。その度に言葉のわからぬ鮮人に「ウズレ」の一語を繰返しつゝ道を問ひます。道を問ふのだとわかると手まねで道を知らせてくれます。聞くといふことの尊さをつくづく感じます。知らぬ鮮人に手まねで敎へられてさらそれを信じ、又も元氣づくのです。『其名號を聞いて信心歡喜する』聞くことが信ずること聞と信とは一つであると云はれたことを眞に感じました。親鸞聖人は法然上人のみ敎によつて、救はれました『親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人のおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり。』と敎のまゝに信じきられました。眞劍に道を求める者にのみ、疑ひも不安も眞暗さもわかつて來ます。さうして敎が、決して話や說明におはらなくて、眞實の敎が敎として生きて來ます。

私たちはけはしい山路を通り、寂しい村里をすぎ、靴を波に洗はれさうな海岸をさまよひ、どう〳〵夜の九時半、目的地たる莊佐里につきました。澤山な金と、二日の時間と、心身共に多大の辛苦とを費したのは一体何故であつたのでせうか。出發に先きだつて、莊佐里からのよび聲を十分に知つておかなかつたからであります。或は花岡君に十分聞いておいてもよかつたのです。やりごにか、よびごにかどちらかをはつきりと聞いて出發すれば決してかゝる間違ひはなかつた筈です。

直ちに

『汝一心……正念にして……直ちに……來れ』

如來は「直ちに」來れとよびます。この直に對して愚禿鈔では、

『直の言は廻に對し、迂に對するなり

また直の言は、方便假門を棄てゝ、如來大願の他力に歸せんとなり。』

とあります。直ちにとは、迂と廻とに對しての御言葉です。迂の字は「まはりどほし」とか。「まがる」とは「とほまはり」と「さける」とか申す文字であり廻は「まはる」「めぐる」といふ字で圓周のほとりを同じ所をまはつてゐることであります。この二文字を一つにして「迂廻」と使ひます。とほまはりをすることであります。一つ所をまはつてゐたり、とほまはりをしたりすることは愚かなことであります。直ちにとは迂廻しないことであります。まつすぐにといふことであります。

如來は私どもにまつすぐに來れと勅命します。私どもは誠に迂回してゐると知らずして何時も、とほまはりしたり、進んでゐる氣で、まはりまはつて一つ世界にゐます生命の道！　信仰は生命の、のびゆく道であります。あらぬ道草を食ふたり、つまらぬことに氣をとられ、或は愚かな世界にとゞまつたり、疑ひのわき道にそれたり、

一つところに腰をかけたりして、まつすぐに不退に一本道を進むことを忘れます。

如來の勅命をまことに聞かねばなりませぬ。如來のみ聲に蘇る時、私どもは道草をやめて、與へられた一本道を精進します。まだ見ぬ眞實の國、光明の廣い世界に願生する者はたゞ如來のみ聲にさまされて、まつすぐに直ちに進ませて貰ひます。眞實の如來の招喚のみ聲によらずしてどうして眞實の道の發見がありませうぞ。

第一の御釋は、『方便假門をすて、、如來大願の他力に歸せんとなり。』であります。方便の門とは眞實に轉入さして下さるための假の世界であります。十九願や二十願の世界がそれであります。凡小のはからひによつて、或は道德的な善をはげんだり、哲學的な思念に囚はれたりして、眞實の國に行かうとしたり、或は稱名念佛をはげんで淨土への行にしようと考へたりする世界であります。眞實の如來のみ聲をぬきにしては、どんな營みもそれは決して直ちに如來に通ずる道ではありませぬ。自力のはからひや、半自力半他力の世界では、決して眞の安心もなく、不退轉の白道を精進してゐ

るのではなくて、迂廻してゐるのであり、とゞまつてゐるのであります。如來は方便の假門を出でゝ、眞ちに如來の本願力に乘托して來れとよばれます。その道こそ、如來より我に渡された、たつた一つの道であり、迂廻のない一實の直道であります。

私の全てをあなたにおまかせして、あなたの大悲をいたゞく所にのみ、宗教價値は人間のよごれをつけないで、聖を聖のまゝに全領させて頂きます。

來れ

「來れ」のお云葉について愚禿鈔には、

『來の言は、去に對し、往に對するなり。

また報土に還來せしめんとおぼしてなり。』

とあります。

去はさること、また往くことは、どちらも、來るの反對であります。來れとは、報土に還り來れとのみ旨であることが表はされてあります。

淨土はまことに我々の靈の故郷であり、親里であります。なつかしい久遠の故郷であります。然るにあまりにも迷執の深い凡夫には、『いまだ生れざる安養の淨土は戀しからず』であります。未だ見ぬ眞實の國であり、忘れられた親の本國であります。親鸞聖人は『久遠劫來流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の淨土は戀しからずさふらうことよく〳〵煩惱の强盛にさふらうにこそ』と悲歎されてありますが、他郷であり、魔郷であるべき、この苦惱の巷を舊里として、どこまでも〳〵執着してゐます。

久遠の親里、眞實の故郷を後にして他郷にさまよへる流轉の子は、流轉の子であることすら知りませぬ。如來の大悲はかくの如く、親を忘れたるさすらひの子の上にそゝがれてあります。

如來の願心は如來を去り、他郷に往く久遠の愛兒に來れと叫びます。如來の願心は

たゞ、『汝……來れ！』であります。我等の唯一の生活は「信」であります。信のすがたは、『願生淨土』である。願生淨土に目覺めることは衆生が如實のすがたをとることである。願生のすがたこそ、衆生のとらねばならぬ唯一なるすがたであります。さうして我等が、この願生淨土にめざめることは、それがそのまゝ、如來の願心のあらはれであります。如來の勅命も、歸命と云はれ、衆生の信も歸命といはれます。かくて我等の信はそのまゝ、如來の願心の顯現であらねばなりません。み佛のこゝろが顯現れて我等が淨土へと還りゆくのであります。

まことに純なる願生のこゝろは、如來の一心の勅命そのものによつてのみおきて來ます。

攝取不捨

『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護る』

我能く汝を護る……何と云ふ宗教味のあふれたみ云葉でありませうか。

行者は、白道の兩がはに火の河を見てゐます。水の河の大波に、おちけてゐます。その唯中に白道を見ます。我と我が心にさかまく火の河、水の河は、靜まつたと思へば、荒れ狂ひます、この現實の上に、如來は强い現生護念の大悲をたれさせてあります。

善導大師はこの如來の願心の護念を力强くも味はれました。白道をふみしめてゆく行者は、如來のみ心にまもられてある。能くとは、「不堪」に對する云葉とあります。堪はたえしのぶとあります。不堪は出來ないこと、たえないことであります。能くとの御云葉は、凡夫の疑心を根底より、打ちこはしてしまひます、凡夫の力ではない。如來のみ力であります。如來の威神力が我等を火の河にも、水の河にもおとさない。

『護とは阿彌陀佛、果成の正意をあらはすなり。

また攝取不捨をあらはすかほばせなり。

すなはち現生護念なり。

とは愚禿鈔のお云葉であります。如來が如來となつた正覺の全体は、その正意は、たゞこの護るとの一字にある。それは、攝取不捨であります。『攝取不捨』といふ文字は眞宗の有する力強い云葉であります。如來の眞實が我等の心にとゞく時、我等はそこに安住し、そこに我等の一切をなげ出して、光明の溫きふところに、蘇ります。

光明徧照十方世界
念佛衆生攝取不捨

とは觀無量壽經の雄大なる文字であります。念佛に救はれた衆生は、この現實のまゝが如來の光明、無蓋の大慈悲に護られてあります。如來の願心によつて護られてあることを信ずる時、我等の足は、本道の大道をふみしめて、力強く、願生の人となります。今一度、聲高く、如來の勅命を拜讀しませう。

『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護る。すべて水火の難に墮せんことを畏ざれれ……。』

すべて水火の難に墮ちはしないかと心配するな、水は高く波うつとも、火は高く燃あがるとも、本願の大道にさはりはない……。（つゞく）

一つなる世界に

住岡狂風

◆

寂しい心、それは人を求むる心であり、人と一つの世界に住したい心であります。千人集つても外面的な心じゐる時には決して滿たされた心はいたしませぬ。我々の裏心の願求は萬人が共に深い心で一つになり、尊とい精神生活で一つになりたい願ひであります。

外面的な肩書や、地位や、職業で、集つた時には、どうしても一つになることは出來ませぬ。心の底にはそれでないもつと深いものを求める願ひがあります。人間としての我、それはいた〳〵しい可愛らしい人間であります。その人間と人間とが純な心にかへつた時、自然に一つに結ばれます。

人を相手どつて開きなほつた時、其處には、純な人間の世界はかくれ、厚い甲冑と甲冑が、荒い音をたてます。

今の地位には隔てがあつても、昔の小倉服の學生時代にかへつて語る時には、純なる魂が動いてゐます。幼心にかへることは純になることであります。

如來樣と一体であるとの自覺は決して甲冑をきた時には味はれない。まことに如來とあふのは、我々の原始のすがたにおいてゞある。男もいらず女もいらず、智者もいらず愚者もいらず……とはやはらかな、生れたてのすがたにかへることである。

合掌禮拜のこゝろ、それは決して甲冑をつけたこゝろではない。我のありのまゝの世界であり、如來のみ心に生きたすがたである。

世の中は荒れてゐる。冬枯の寒さがひし〳〵とせまる。しかし私たちは、まだ見ぬ眞實の國へ願生することを忘れてはならぬ。願生のこゝろは淋しい。しかし

『彼の無碍光如來の名號は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を滿てたまふ。』

のであつた。眞のたましいの滿足はこゝにある。この如來の大悲の前にだけ、私のすべては照し出されて禮拜の心にならせられる。

◈

人と人との接觸は、人生における大きな問題であります。一つ心にとけあひたい。男女の間の戀愛は完全に相手と一つになつたやうな氣がする。しかしそれは戀の白熱の時だけである。さめた時、男と女は永遠に二つである。

一切の個人といふ個人
一切の團体といふ團体
一切の社會といふ社會が
心を一つにして
同じ人生の意義をつかみ
同じ精神生活にたずさはり
協力一致して、

人間及社會の終極の完成のために一つになつて精進し努力する世界、
我等の心はそれを求める。
過去の聖者の心はこのかぎをにぎり、それを大地の上に生かそうとした。
私たちは宗教の世界にこの理想を生かさうとする。
しかし現實の世界は永遠に決して、それではない。なければこそいよ〳〵それを求める。

◈

『同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海のうち皆兄弟である。』
天親の大會衆門がこゝに開かれる。大會衆門とは、
『願はくば、この功德をもつて
平等一切に施し

同じく菩提心をおこして
共に安養國に往生せん。』
といふ理想の實現された世界である。
同じ光明廣海に浮び
同じ本願の大道に出で
同じ如來に生き
同じ如來に合掌する
聖者の世界であり、兄弟の集まれる世界である。

◆

同じ感情に燃へても、それだけでは一つにはなられない。若い者は花火のやうな美しい感情で一つになつたやうに思ふ。しかし暴動をおこす者たちの心理にも感情は一つに燃える。感情はさめた時決して一つではない。烏合の衆ほど寂しい者はない。

机一つへだてゝ、弱い人が泣いてゐる。何處會ふても同じ事を繰返して愚痴ばかり云つてゐる。如何に同情しても、其同情を有難がられるばかりである時、その人とは遠い〳〵隔たりを感ずる。

心の眼が開いて、同じ世界に呼吸する時、一つになれる、ほんとの師と弟子との間が美しいのはこのためであろう。法藏菩薩は一切衆生に、至心、信樂すべきことを誓はれた、法藏の願心に生きる者だけが、法藏菩薩の成就せる阿彌陀佛國の聖衆である淨土に往生するとは、この如來のたましいにかへり、同じ願心に生きてゆくことである。如何に國土が美しくても、佛の功德が美しく成就されても、その國土に往生する者がゐなかつたら決して美しい世界ではない。これ如來に一切衆生をして『諸の衆生をして功德を成就せしむ。』と誓ひ、同じ念佛を廻向せしめられる所以であらふ。

救濟といふことは決して、この如來の誓願の信と行とをおいて、外に善惡をもつて

はからふことではない。これ信が最上善と云はれる所似である。

◆

救ふことが眼目である宗教では「自己を知れ」とは教しへない。どこまでも『如來を知れ』『如來を聞け』と教へる。如來を聞くとは、眞の意味においては、久遠の我を聞くことである。如來は勿論、我ならぬものである。我ならぬ如來が我になりたまふ所に、佛凡一体の救ひがある。聞くことによつてのみ信が成立つ。信とは、如來と我との一体の目覺である。

◆

純なる願生を思ふ時、聖人をなつかしまずにはゐられない。純なる願生とは、いよいよはつきり、彼岸の勅命を聞くことであり、如來を聞くことである。彼岸を聞き如來にかへる時、いよ〳〵現實がはつきりする。現實がはつきりする時、いよ〳〵純なる願生をおもふ。我々は所詮道草の子である。道草から純なる願生に導きたまふものは唯如來のみである。

◆

限りなく一切衆生と共なる世界を求めてやまない。一つになる世界は如來をおいては外にない。それは單なる感情でもない。單なる智でもない。全人格の世界である。

我等の現實は依然として寂しい。しかし合掌の世界においてのみ、一切衆生と共なる世界を觀じ、一切諸佛と同一なる呼吸を感ずる。この世界は高い世界ではなくて、一切人の惱みと苦しみを一人格に見出し生死海底においてである。

私は念佛しつゝ、そこになつかしいあなたを發見する。さうして共にかの世界に願生しやうと願はずにはゐられない。（をはり）

◆創立十週年記念◆

追憶の記

釜瀬春芳

汝は汝の敵を求めねばならない汝の戰ひを戰はねばならない。
汝は汝の思想に向つて戰はねばならない。汝が平和を求めるならばそれは新らしい戰ひの準備としての平和であれ、長い平和よりも短い平和を求めよ。
余は汝に仕事をすゝめない。寧ろ戰をすゝめる。余は平和をすゝめない。たゞ勝利をすゝめる。
汝の事業をして戰ならしめよ。
汝の平和をして勝利ならしめよ。
汝は曰ふ。善行のためには戰をも犧牲にせよと。余はいふ善戰のためには、事物をも犧牲にすると、
汝の敵には嫌ふべき敵を選べ。決して輕蔑すべき敵を擇ぶな。
汝は汝の敵について誇りを感ぜねばならぬ。然らば汝の敵の成功も亦汝の成功である。

――――ニイチエ――――

光明團創立十週年……

そうした言葉を聞いただけでも本部の内實と住岡先生とをよつく知つてゐる私には、涙ぐまずにはゐられないのである。更にその裏面に隱れて十ケ年間忍從して來た同胞を思ふ時、感慨無量である。單に十ケ年間繼續したと言ふことのみが尊いといふのではなく單なる忍從が尊いと云ふのでありません。尊いのは團に集る人々の中心の念願が同一の超世の悲願を聞きつゝ菩薩道を念願して來たことである。このことを思ふ時如何に不徹底且つ無學であらうともそれが本能的慾樂の莊嚴のみではなく中心が淨土莊嚴にある時、現實的生活はたとひ不完全であらうともそれは尊いのである。

念願は人格を決定す。

繼續は力なり。

とは狂風氏の唯一の訓言である。そうです。如何なる行爲も如何なる哲學もそれが如何なる念願に統一づけられてあるかゞその人全体を評價するのです。しかしてその念願が萬人に閃光の如く閃きつゝそれが繼續せられてゆくことは不斷に内に信火が燃えてゐなくては不可能なことなのです。

今光明團が十週年といふ聲を聞くまでにはそこには一口には言ふことの出來ない裏面には幾人かの若き血潮が捧げられてあります。

大會第一日私が指揮して第一團歌を歌ひ始めた時、今までにかつて味つたことのない新らしい意味を以つて私の胸にあるものが迫つてきた。殊に本部員の瞳には言ひ合せたやうに涙がにじんでゐた。

※

二十六七八の三日間に市内各所に八百枚の辻ポスターが團員本部員の人々によつてつられる。住岡秋作氏、啓三氏を始めとして各員總出となつてタスキがけにてポスターを書く印刷部の機械が忙しうに動く、夜の屋外傳導と一萬餘枚の宣傳ビラとが團員本部員の方によつて愈々來るべき戰宣布告に肅々として歩みを運ぶ。主管は原稿と市内八ヶ所の移動講演に全力を集中して貰ふ。斯くして三十日となるや、聖光があがり全員集つて整本にかゝる二階では雜誌の帶封が書かれる。夜になると市内の團員の方が晝の疲れもいとはずポスターやビラを手にして出て下さる。各地の皆樣から大會へと思つてたくさんの贈物をして下さる。

かくして愈々長い宿望だつた大會は火蓋を切らうとする。

※

太陽が二葉山頭に曉を告げると愈々大會第一日が訪づれる。會場たる藝備銀行樓上の大講堂には天滿町吉本氏の寄贈になる四鉢の大菊花が靜かに薫りを放つてゐる。銅色の電氣時計が十二時を指示する頃になるとエレベーターは一臺〳〵毎に聽衆を送る。やがて一時となるや嘆佛偈を誦し終つて花岡悲風氏が登壇開會を告げる。次いで臺恩狂氏生活の諸相と信と題して四十分涙を以つて聽衆に迫る終つて第二團歌合唱次いで住岡主管大無量壽經讃仰と題して一時間半に亘つて獅子吼四時第一日第一回の講演は終る。我等は此一面によつて我等の欲したる會であることに自信を以つた。聽衆すべて有識階級と青年男女多し。夜に入るや我等の待ちし長尾哲馬氏は御都合惡しく再三の打電を以つて來て下さることが出來ぬと來る。七時となるや會場は滿員嘆佛偈團歌に次いで私は時代思潮と宗教の本質について四十分語る。次いで萬雷の拍手に迎

へられて住岡主管宗教の使命と本質と題して一時間と五十分の熱演……十時思づまるような緊張を殘して靜かに靜かにエレベーターは聽衆を送る靜かで上品で氣持のいゝ會だと誰かゞ云つて下さる。

第二日朝七時我團旗と共に京都より龜川教信先生が來廣下さる。本部員の滿足の笑が見へる、各地の同胞が續々見ゐる。よくいらつしやました。有難う……それだけで後は云ゐぬ。戰場の如き混雜の中に各自中食をすまして二時となるや聽衆は日曜の事とて早くより押かけてエレベーターは忙しく廻轉する。一時となるや十週年記念式典擧行、釜瀬導師となり一同嘆佛偈拜誦、福山橘高秀次氏指揮の下に第一團歌合唱花岡總務合掌宣言及び本領朗讀し次いで住岡主管挨拶終つて大無量壽經について一時間の獅子吼次いで龜川龍大教授世相の洞察と題し世間とは何ぞやといふ問題に對して靜かに學的態度と信仰とを以つて二時間半に亘つて熱心そのものゝ如く語つて下さる不思議に先生のお話が我光明團思想と同じであることを知つて本部員一同のよろこび

は殊の他であつた。

私は此度は殊に宗教團体の行先といふことについて考へさせられた。一つの團体が維持されてゆくのには多くの經濟的にも人物にも犧牲を要する。それが内容は殆んど無くてもあつても我等の生活にたいした關係せないような團体までが雨後の筍のやうに生れては亡びる。考へなくてはならぬ問題である。時代と我等の生活に沒交渉な而も正しい眞理と理想を持たぬ團体は潔ぎよく地を拂はねばならぬ。何等論理的根據を以たず自今勝手な獨斷を眞理だと思つて懸命になつたり時代思潮を考へて見たこともない團体がやたらに宗教を擁護しようと努力したりすることはむしろこつけいに價するものである。自己の信念を社會に徹底せしめるためには團体も運動も必要である。問題はその所信が如何なるものであるかゞ問題なのである。現代に最も必要なのは殊に宗教團体に於いては時代の如何なる相も思想もハツキリと理解しつゝ復雜極りなく行きつまれる現代に對して正しき歸趣を明示しつゝ人類の暗を打開して正しき生活を創造せしめる元動力を與へねばならぬ。正しき智慧によれる人生の認識と自覺者王國の人生創造、それを不能ならしむべき信の提唱こそ宗教の持つ獨自の使命である。

龜川教授の話はそうした問題に對して最もハツキリと宗教が社會の諸相の背後にあつて靜かに時代の歸趣を明示せねばならぬことを說いて下さつた。然り一如の世界に於いて無限に空ずる我等は如來の世界に於いて限りなき還相をつゞけねばならぬ。

夜に入るや主管は宗教の使命に歩を進めて一時間餘を話され次いで廣島佛教青年同志會長龍永悟由先生が祝辭によせて四十分間感想を語られ終つて龜川教授は人間とは何ぞやの講題を持して登壇、日曜の夜のことゝて滿堂の聽衆は一樣に或る興味と拍手を持つて迎へる。いと靜やかに說きいださるゝ哲理と信仰に聽衆寂としてまたゝかず聞き入る。

※

第三日、一時となるや死亡團員追悼會各員遺族燒香靜かに且つ力づよき眞宗々歌に去りにし友をしのびつゝ主管の講演にうつる主管は此壇に於いて大無量壽經の本質を最も具体的に論據づけを以つてお話し下さる。モーニング姿の龜川教授の講題は信と懺悔を明かにし佛とは何ぞやの問題に入り二時間に亘りての獅子吼は聞く人をして佛に對する新らしき意義と暗示を受けた。第三日最後の夜は訪づれる六時となるやソロ〳〵と、ユレベーターは聽衆を送り七時主管は最後の壇に望んで話しの中心は宗教の本質を語り其使命を訴へる。龜川教授は我等の期待したる信仰生活の内容と題し如何に生くべきかの問題に對して熱心に語つて下さつた。私は先生の意見に對して大いに同感であつた。それについて私は書きたいことがあるけれども長くなるのでこれでおきます。

かくして光明團は意義深き使命を果しつゝ、龜川教授の如何に生くべきかの結論を最後の幕として終りを告げた。此間毎日本部においては朝八時より十時まで主管並びに本部員が代る〳〵信仰問題を中心に臨時講演會が開かれた。

第三日夜、閉會後は本部員其他極親しい者のみによつて二階に於いて座談會が開かれた最も嚴肅なる意見の交換をなし光明團の態度について語り合つて就床する時に夜明の三時階上も階下もつかれた人達の寢息のみが聞こえてゐた明る四日は午前八時より特別に本部に於て講演、私は親鸞聖人の和讃に現はれたる、淨土と地獄についての感想を四十分ばかり語り主管は信仰における自覺と生活對度について一時間餘語られた。色々な問題を中心に主管の話しを意義深く聽かして頂いた。各地の同胞は思ひ出をはるかに殘して去り行く午後三時主管は福山地方へ講演の旅に……

終りにのぞみて各地の皆様の聲援又は祝電淨財の喜捨等によつて恙なく大會も終りましたことをお禮申し上げます。

理解と同情

□

『お前はあれだけ、法を聞いたり念佛するのに、まだよくならないのか。』

さうした云葉を新らしく道を求める人の上に周圍の人から與へられることを度々聞かされます。おこしやすい心持ちであり、出やすい云葉であります。ともすればかうした心持をおこしやすい我々は深い反省をさせられます。

□

人は大抵、客觀の改造論者であります。精神的に生きてゆけとは他人にあてはめる云葉であつて自分が守る云葉ではないのであります。親は子を、子は親を、妻は夫を、夫は妻を、姑は嫁を、嫁は姑を、改造しよう。それらが改造されたなら、其處に幸福が生れる、自分の生きる道がある。かうした考へが一ぱいみなぎると必ず其處には爭ひがおこります。爭ひがおこるとます〳〵他人が惡く見にて、理解も同情もなくなります。

□

長い間精神的に暗い道を來た奥樣がありました。この方が宗教の世界に走りはじめた時、その夫も、その兩親も親類も口を揃にてよろこびました。しかししばらくすると周圍の人たちは云ひはじめました。

『あれだから駄目だ。いくらたつても善くはならないではないか。宗教などつまらぬものだ。』

その聲を聞くと共に奥樣はあせりはじめました。さうして早く周圍の人が滿足するような人になろう。自分の信仰はまだ駄目なのだ。どうすればいいのかと苦しみはじ

めます。あせればあせるだけ、善くなるかはりに焦りぢれて來ておちつきがなくなりますかうした。皆のはからひがまま〳〵この女を暗い世界につれこみます。信仰の世界をまるで仁丹か注射位に考へてゐるのです。自分は求めないくせに。

□

他人に求める前に一歩しりぞいて、自分の姿や態度を凝視めようではありませんか自分の上にこそ、理解も同情もない冷さがありはしなかつたか。

古往今來、もめごとや爭ひの一日も一時もやんだことのないこの大地の上になげ出された私どもは、大地の上の眞相をみつめる眼を開いて抱かなくてはなりません。さうして合掌の中に一切を受取つてゆくほんとの魂の世界に歸らねばなりません。

□

親がよいか惡いかよりも、妻が惡いか善いかよりも、その人があるがまゝの中に、どう生きたかといふことが私どもの見なくてはならぬ世界です。妻の精進で夫が一生涯の中によくなるかもわからず、よくならないかも知れません。妻が一生夫を虐げ惱ます時もあるかも知れません。相手や周圍がよくなつたか、善くならなかつたかよりも、其中に生きた道ゆきこそ見なければならぬ道であります。

とはいふものゝそれは出來る道ではありません。一切の底に合掌して一切を強く受取つてゆく道は往きやすくして人なき世界であります。

周圍の人を皆よくしてからであれば誰でも美しく生きて行けませう。大地の上はさうなる日はありませんし、もしさうなつたら生きねばならぬ道もありません。光は唯暗い世界にのみ用事があります理解と同情はそれ自身光であります。

本年はこれでお別れです。

皆さま。どうぞおたつしやで大きなとしをおむかへになりますように……（本部員一同）

十週年記念大會 御芳志感謝錄

（會計係發表）

金五圓　黑川龜記樣
金二圓　藤川まさ子樣
金三圓　匿　名
金一圓　木村正俊樣
金七拾錢　織田彌太郎樣
金五拾錢　栗原政次郎樣
金五拾錢　橋本やね子樣
金三十錢　栗田忠吉樣
金二十錢　栗田久四郎樣
金一圓　板谷賈太郎樣
金一圓　羽原守夫樣
野菜一荷　佐々木菊次郎樣
金二圓　佐々木すゑの樣
金一圓　佐々本よし子樣
金一圓　福泉寺樣
金一圓　石井うめ樣
金五拾錢　石井つれよ樣
金三拾錢　兒玉金一樣
金五拾錢　伊藤みれ子樣
金三十錢　石井民子樣
金十圓　匿　名
金一圓　土屋大造樣
金一圓　藤井吾市樣
仝　上　小田村人樣
金二圓　近藤みきよ樣
金三拾圓　中井茂樹樣
金一圓　淵上增吉樣
金一圓　石井もと樣
金五拾錢　倉本政太郎樣
金五拾錢　菅原かめこ樣
金五拾錢　佐藤てる子樣
金二十錢　柿本正夫樣
金一圓　羽原嘉市樣
金一圓　藤井寛一樣
金十圓　森　忠男樣
仝　上　寺田一三樣

金一圓五十錢　原田すみ子樣
金三圓　岩部源太樣
金十圓　眞　光　寺樣
金二圓　谷本久子樣
金一圓五十錢　加藤いし樣
金一圓　重河御内樣
金七圓　親　仰　會
御鉢米一俵　松浦勘五郎樣
野菜一荷　津田支部
金五十錢　匿　名
御鉢米　對鳥屋樣
金三圓　岡野とし子樣
金十圓　匿　名
金一圓　栗栖はるの樣
金二圓　大本彌太郎樣
金五圓　石井睦訓樣
金一圓五十錢　坂本まさ子樣
金一圓五十錢　井上滿香樣
金五圓　臺　一乘樣
金一圓　森本多市樣
御鉢米　野菰一荷　柿浦團員樣
金一圓五十錢　山田はるの樣
金一圓　小字羅すぎ樣
立　花　村上先生
金二圓　山本君子樣
金十圓　松岡元之助樣
金十圓　河井方子樣
金二圓　藤本茂美樣
金二圓　畠山なゝ子樣
金一圓五十錢　小林なつ子樣
金五圓　松岡賢一樣
金五圓　洗心書房樣
御鉢糸　今　本　屋樣
御鉢米二斗　津田支部
金十圓　匿　名
金三十錢　中　村　樣
金五圓　西川保吉樣
金一圓　岡本　霖樣
金一圓　久　保　樣

拾週年大會 御芳志感謝錄

會計係發表

一、金拾五圓　匿名氏

一、金拾圓　佐々木秀夫様

一、金參拾圓　住吉勝代様

一、金五圓　佐々木溫三様

宗教講座　第一輯

『聖への扉』　定價金參拾錢

豫告しておきました、主管宗教講座第一集を「聖への扉」と改題して、漸く發行することが出來ました。先づ、釋尊の成道に出發して、ふかい宗教的意義をたずねてゆきました。如何して大聖は生れたか！　成道とは何か！　根本佛教は何か說かんとするか、如來とは何かを說き、ひいて親鸞聖人の世界をのぞきかけてゐます。求道に志す皆様におすゝめいたします。

本誌定價

一部　金十錢（郵稅共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

昭和三年十一月十日印刷
昭和三年十一月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木溫三
印刷所　光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本眞宗　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番

金一圓　新田八千代様
金一圓　佐々繁様
金十圓　中丸登米吉様
金五圓　西口様
金一圓　土井正義様
金五圓　佐々木睦子様
金五十錢　大石しず子様
金一圓　宍戸直衛様
金二圓　小田紅陽様
金二圓　大野獨來様
金五圓　寺田一三様
金一圓　匿名
金二圓五十錢　藤鬼しげ子様
金一圓　藤本藤子様
金三圓　東吉太郎様
金五圓　平重吉様
金五十錢　大利はる様
金四圓　田坂正男様
金二圓　小笠原信子様
金五十錢　住田壽子様
金一圓　東岡文子様
金二圓　小田守登様
金二圓　河野如風様
金五圓　栗栖たつの様
金二圓五十錢　大平晴子様
金二圓五十錢　橋高秀次様
金四圓　古井宮人様
金一圓　中村大一様
金一圓　寺本やすよ様
金四十錢　匿名
金二圓　玉屋様
金五十錢　小島つる子様
金一圓　滿井讓様
金三圓　中務靜磨様
金二圓　正木若葉様
金二圓　小笠原徹光様
金五十錢　山根彌三様
金二圓五十錢　平きく様
（以下次号）

お願ひ

一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきりお記し下さい。
一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい
一。誌代拂込は振替を御使用下さいやむを得ぬ時は使ぬようにして下さいやむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。
一。文字をはつきり正確にお書き下さい。
一。主管に特別の用事の外申込中止送金等は一切事務宛に御送附下さい。
一。誌代前金切の時はどうかお早く御送金を願ひますお困りのお方は其旨御申越し下さい。

本誌定價
一部　金十錢（郵稅共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

昭和三年十二月十日印刷
昭和三年十二月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木温三
印刷所　光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本武崇　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番